
小話集『徳川イエス』

穂積礼富

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小話集『徳川イエス』

【NZコード】

N2718D

【作者名】

穂積礼富

【あらすじ】

キリストン大名徳川イエスの開いたエド幕府とは……表題作『徳川イエス』ほか『百歩蛇』、『クローン』、『動物の権利』の計4話。ナンセンス小話。

『百歩蛇』／『クローン』

『百歩蛇』

むかしむかし、この村のあたりにはよく毒蛇が出た。中でも百歩で毒がまわって死ぬという、百歩蛇の噂は村人を震え上がらせた。

それで、木が生い茂った山道のあたりは特に怖くて、ふだん用のない者は誰も近寄らなかつた。

それでも、食うに事欠いて、山菜田畠でに嫌々山を田植す者があとを絶たなかつた。

太郎もそのひとり。空腹に耐えかねて、ふらふらと山を登つた。

若い太郎は足腰も強く、粥腹を抱えても何とか進んで行つた。

しかし道中、案の定、毒蛇と鉢合わせ。

逃げようとしたが、肝心なときに力が入らず、あっさり噛まれてしまつた。

玉虫色に光る鱗 あれは間違いなく百歩蛇だ。

太郎はそう確信し、絶望したといつ……。

……「うちの太郎じいさん曰く、これ以来車椅子の生活を余儀なくされていろいろしい。

まあ、うちのじいさんの言う「」だから、当てにならない。

『クローン』

クローン・カンパニー設立のニュースは余りにも突然であり、また余りにもセンセーショナルだった。

欧洲の某国。ここに、クローン研究を専門とする会社が興つたのだ。倫理的にも技術的にも課題の多いクローン技術である。宗教界は黙つていなかつたし、一般市民にも不安が広がつた。

その後、この会社を興した人物が、内臓に病気をもつた老齢の大企業会長であると報じられるにあたつて、批判はピークに達した。彼は、螢雪の末、小さな会社から一代で大企業に育て上げた苦労人であつた。それゆえ大変尊敬されていたのだが、今回は彼の臓器移植のためにクローンが研究されているのだろうと噂になつたのだ。

果たして彼のクローンが誕生した。

「おお……」

眉間にしわを刻んだ老齢の会長は、誕生したばかりのクローンのいる保育器を見るなり、歩み寄つてそつと話し掛けた。

「私は長い間仕事一筋で、女には目もくれなかつた

今にも泣きそうな顔で、保育器のガラスを指で触りながら続けた。

「ああ、私の息子よ、『完全なる跡継ぎ』よ」

『動物の権利』

科学の発展といふものは恐ろしいもので、ときに人類文明の存続をおびやかした。

深刻な環境破壊や兵器の凶悪化、そして機械文明の誕生。その他様々な科学進歩の副産物は、我々をそのつど震え上がらせてきた。まさに諸刃の剣であった。

しかし過去十年においてもつともショッキングだったのは、やはり“百獸文明”的誕生であろう。

自分達のペットに入間と同じ意思や感情、言語中枢を埋め込み、「これで本当の遊び相手ができた」と、得意気になっていた頃が懐かしい。

そのうちに、捨てられたペットや自立したペット達が群れを成しはじめる。動物園の客寄せに倦んだ獸たちも相俟つて、勢力となるのに時間はかからなかつた。その上自分達の仲間に精神を埋め込む術を会得してからは、輪をかけて発展していった。

それから僅か半世紀で、今日の大文明は成つたのである。

そして今では、そもそも「ペット」などと気軽に言えない。口を滑らせたら、やれ差別語だ何だと批判を浴びるのが落ちである。

このような「動物の動物による動物のための権利」が主張されはじめたのは、今から30年ほど前からだろうか。

はじめ、犬の権利「犬権」が犬族の大統領によつて叫ばれたときはジョーク扱いだつたが、その後猫族首相の「猫の憲法」やら、はたまたシシ王による「獅子神権」などが次々発表され、笑いごとでは済まなくなつた。

動物たちは権利を主張する中で、次第に独立意識が強くなり、文明を築かんとして、我々人間と対立するようになつたのだ。

機械独立戦争で苦杯を嘗めた人類にとって、争いは避けたかった。
そもそも人類は、知性によつて文明を築いてきた。所詮貧弱な体を武器で補い、動物達を従わせてきたに過ぎない。いま“彼ら”は同程度の知性をもつて同程度の武器を“足中”におさめている。そして身体能力ではかなうはずもない。負けるのは目に見えていた。結局お互いの文明を認めあい、尊重しつつ共存していくことで同意し、和睦となつた。

そして今日、和睦の証として、人類文明圏の各地に、“偉獸”たちの銅像がたてられはじめた。

我が国の大駅前　かつての隸属の象徴として犬族から忌み嫌われていたため、和睦に際して取り壊された忠犬ハチ公像の跡地。ここには、虫の権利「虫権」をはじめて訴えたことで有名な虫族の蜂の公爵、【虫権蜂公】の銅像がたてられることとなつた。もはや笑うものは誰もいなかつた。

『徳川イエス』

キリストン大名徳川イエスが天下を握つてエド幕府を開いてから、我が国の歴史は大変換を見せた。

神道は軽んじられ、仏教徒は弾圧された。ときの帝は御怒りで抗議の御譲位をあそばされたり、僧侶や仏教徒は信仰のため“隠れブティスト”となつたりした。

仏徒一揆は各地でおこつたがことじとく弾圧され、寺院は破壊された。その跡地には次々と教会が建てられていった。國中の他の建物も西洋風の造りに改められ、人々は洋服を身にまとつた。藩主から庶民までみな洗礼を強要された。

伊達マンショ、前田ミゲル、毛利マルチノ、島津ジュリアン……。

やがてそんな無理がたたり、大規模なクーデターがあこつた。神のもとに平等という考え方が、主従の関係を希薄にしたことも大きかつた。自害を拒否した徳川イエスは磔に処された。

そして……。

徳川イエスは復活した。しかし、それは戦国大名としてではなかつた。歪んだエド時代にとつてはパラレルワールドにあたる、現在の我が国に復活したのだ。

神は言った。

「汝が生まれることなく時を経た汝の国の末路だ」

「ああ、主よ、私はどんな困難にも耐えてみせます」

しかし彼は、異常な状況を飲み込んだのか、ひどく落胆した。

私の理想はここまでか。

しかし彼は、主やキリストを讃える歌を耳にしたり、飾り付けを目にするにあたって、希望が湧いてきた。

そう、街はクリスマスムード一色であった。

よく見ると街じゅうの見慣れぬ建物には英語の看板が立ち並び、人々は変わった洋服を身にまとっている。

田の前を女の子が通り過ぎる。

「これ、真理両、待ちなさい」

父親が呼び掛ける。

田の前を男の子が通り過ぎる。

「これ、瑠偉、待ちなさい」

母親が呼び掛ける。

徳川イエスは思った。

「幼い子供までがみな洗礼している。どうやら私のいない世の中で

も私の理想は叶つていらうらしい。神よ、感謝申し上げます。アーメン

『徳川イエス』（後書き）

ナンセンスなオチをお赦し下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2718d/>

小説集『徳川イエス』

2010年10月11日18時26分発行